

THE A MUSEUM

Vol. 12-2 第35号 2017.10.3

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

特別展

上杉家の 名刀と 三十五腰

謙信・景勝の名刀、埼玉に集う！

戦国時代の雄、上杉謙信は関東管領職を継承し、天皇家・将軍家などから数多くの名刀を贈られました。また謙信の養子景勝も、養父の刀剣を継承し、「上杉景勝腰物目録」を記すなど、刀剣に強い関心を持っていました。そのため、現在まで伝わる同家伝来の刀剣類には、国宝や重要文化財となっているものが少なくありません。

本展は、米沢市上杉博物館（山形県米沢市）、佐野美術館（静岡県三島市）、そして県立歴史と民俗の博物館の、上杉家ゆかりの刀剣を所蔵する3館が連携して実現しました。

11/3-12/10
金・祝

特別展

上杉家の名刀と三十五腰

平成29年11月3日(金・祝)～12月10日(日)

—この秋、上杉謙信・景勝ゆかりの名刀が埼玉に集結！—

旧米沢藩主上杉家にゆかりがある刀剣には、現在国宝や重要文化財に指定されているものもあり、いかに同家に名刀が揃っていたかがわかります。本展では、上杉家に伝来した名刀のほか、国宝上杉家文書をはじめとする歴史資料や優れた美術品を通して、戦乱の世を駆け抜けた謙信と、新たな時代へ移りゆく激動の時代に上杉家を守り抜いた景勝の生涯をご紹介します。それとともに、名刀を未来へ引き継ぐべく尽力した上杉家歴代藩主の歴史もたどります。

I 謙信時代の名刀

上杉家は、室町幕府が関東を統治するため設置した鎌倉公方を補佐する関東管領職を世襲し、同家一門は埼玉県域を含む武蔵国・伊豆国(静岡県)・上野国(群馬県)・越後国(新潟県)の守護職を務めていました。越後国守護代として上杉家を支えていた長尾景虎は、後継者のなかった上杉憲政から永禄4年(1561)に関東管領職を譲り受け、ここに後の上杉謙信が誕生しました。同時に、謙信は上杉家の刀剣も譲り受けました。



長尾景虎願文写、千葉県指定文化財、妙本寺蔵

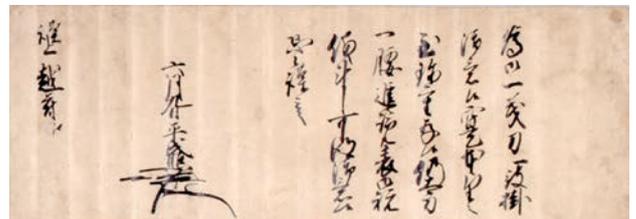
混乱する戦国の世に、道徳を重んじつつ越後を統一し、関東にまで勢力を広げた謙信は、名だたる武将のなかでもひときわ目立つ存在であったの

でしょう。謙信は生涯で幾度となく戦に赴きましたが、それは自分のためというより、天皇や将軍のもと社会の秩序を回復させ平和な世を実現するため、また助けを求める人々に応えるためであったと言われていいます。そのなかで刀剣は贈答品としても欠かせなかったことを記録から知ることができます。

謙信時代の刀剣には上杉・長尾家伝来の名刀が多く、シンプルかつ機能的ながらも気品があり繊細な拵がつけられました。



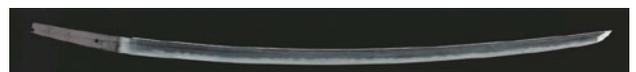
太刀 銘 一、号 姫鶴一文字、重要文化財、米沢市上杉博物館蔵 ※後期展示



北条氏照書状、国宝、米沢市上杉博物館蔵 ※後期展示

II 景勝時代の名刀

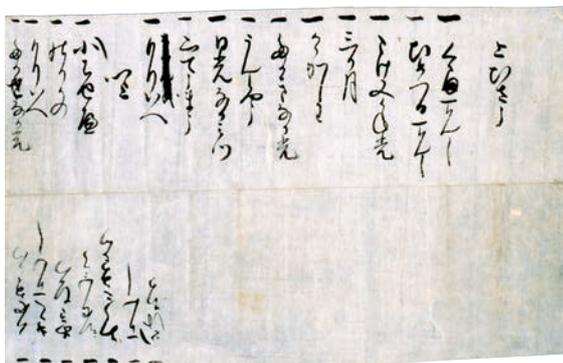
謙信の急死後に御館の乱を経て上杉家を継いだ養子景勝は、豊臣家との関わりから上杉家の地位を向上させました。しかし会津(福島県)への移封、さらに関ヶ原での敗戦後には米沢へ移封を命じられるなど、上杉家は激動の時代を生き抜いていきます。



(上) 鍔 銘 城州埋忠作 文禄二年十二月日、重要文化財、上杉神社蔵、部分
(下) 太刀 銘 吉家作、個人蔵

ところで景勝は謙信と同様、刀剣に強い関心をよせていました。景勝が上杉家の刀剣で特に秀でたものを記した「上杉景勝腰物目録」(写真下)はよく知られています。また景勝に仮託したと考えられる「上杉景勝御手撰三十五腰」という刀剣の一群の存在も伝えられています。

景勝時代の刀剣には、時代を反映した秀吉好みの華やかな拵が付いています。



「上杉景勝腰物目録」2紙のうち、国宝、米沢市上杉博物館蔵
※展示は複製

Ⅲ 歴代藩主の刀剣

江戸時代、上杉家は断絶の危機にひんしましたが「古き家二候」という理由で免れました。

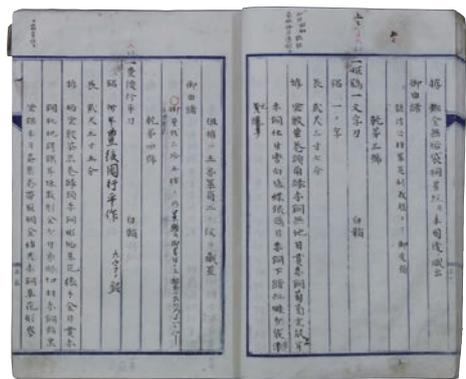
上杉家の名刀の多くは、謙信・景勝以来の同家の誉れを象徴しており、歴代藩主も刀剣に関心をもったと思われまふ。そして同家伝来の刀剣には、上杉家の家督を継ぐ際に譲り受けたことや、藩主の指針であったことが台帳に明記されるもの、また藩主の好みも反映している刀剣も見られます。



脇指 無銘 大進房、個人蔵

Ⅳ 大名家の刀剣管理

上杉家以外にも、将軍家や多くの大名家に名刀が伝来しました。武士の魂である刀剣は、戦乱の収まった江戸時代以降も大切に管理・保存されており、その過程で多くの刀剣が台帳に記されました。そこには、現在にも受け継がれる名刀も見られます。



刀剣台帳 甲簿 式 刀剣之部、佐久市教育委員会蔵

謙信や景勝の偉功を象徴する名刀。それは多くの人々を魅了してきました。そして上杉家の名刀の輝きは、現在もなお私たちの心を捉えてはなしません。

明治維新による武士の世の終焉、第二次世界大戦の敗戦に伴う連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令による刀剣類の接收など、名刀保存の道のは平坦ではありませんでした。数々の困難を乗り越えて本展に一堂に会した名刀は、まさしく奇跡の名刀といえるのです。



短刀 銘 吉光、号 五虎退、重要美術品、個人蔵（米沢市上杉博物館寄託）

また本展では、若い女性を中心に大人気を博しているPCブラウザゲーム&スマホアプリ「刀剣乱舞-ONLINE-」とのコラボも見逃せません。詳細は決まり次第、ホームページなどでご案内しますので、どうぞお楽しみに！

前期：11月3日～11月19日

後期：11月21日～12月10日

※一部、展示替えがあります。

【本展は下記会場と連携しています】

・米沢市上杉博物館

特別展「上杉家の名刀と三十五腰」

平成29年9月23日（土・祝）～10月22日（日）

・佐野美術館

「上杉家の名刀と三十五腰」

平成30年1月7日（日）～2月18日（日）

（展示担当 関口真規子）

まえ かわ くに お 「ル・コルビュジエ」と「前川國男」

近代建築の巨匠ル・コルビュジエ。昨年7月、その作品群が世界文化遺産に登録されました。これを機に、弟子であり当館の設計者でもある前川國男氏の建築が、改めて、注目を集めています。前川氏は代表作の一つとして当館を掲げており、建物見学の目的で来館される方もいるようです。

前川氏は、東京帝国大学の建築学科に在学中、助教授から借りた著書を通じてコルビュジエの存在に出会います。余程、心酔したのでしょうか、卒業したその夜、シベリア鉄道経由でパリのコルビュジエの元に旅立ったというエピソードがあります。

さて、当館の建物に目を向けてみますと、鉄筋コンクリート造であり、水平連続窓（図1）などコルビュジエの提唱した近代建築の要素が随所に見られます。



図1 水平連続窓 近代建築には構造壁がなくなり、大きな窓の設置が可能となりました。

しかし、当館は、単にコルビュジエ作品の延長線上にあるわけではありません。むしろ、代表作であるサヴォワ邸などと比較すると似ていないと言った方が良く、前川氏のオリジナリティーにより素晴らしい建築作品に仕上がっています。

当館の特徴の一つ目として「打ち込みタイル」があります。戦後の建築は、打ちっ放しコンクリートが多く使われていましたが、雨や湿度による壁面の劣化が課題でした。一方、モルタル接着剤でタイルを貼る工法では、タイルの剥離が懸念されました。そこで、前川氏はタイルをあらかじめ外型枠に釘止めし、コンクリートを流し込み一体化することで、この問題を解決したのです（図2）。

当館は、竣工から半世紀近くも経ちますが、今

も外壁の剥落もなく、落ち着いた味わいのある雰囲気醸し出しています。



図2 打ち込みタイル 穴は釘止めの痕跡。

特徴の2つ目として「一筆書き」があります。「いいプランは美しい。プランを練っていくと一筆書きで描けるようになるんじゃないか」これは前川氏のコメントです。

来館者は、武蔵野の面影を残す大宮公園から木々の間をぬった長いアプローチを経て、エントランスに導かれます。そして水平連続窓から見える美しい景色を眺めながら、回廊のように展示室を巡ることができます（図3）。



図3 一筆書きのプラン 日本人の好む書院造りの構造に似ています。

このように当館はコルビュジエの提唱した近代建築の基本を踏まえつつ、前川氏によって、素晴らしい建築作品に仕上げられており、数々の建築関連の賞も受賞しています。

最後に、余談ですが、ル・コルビュジエはペンネームであり、フランス語で「カラス」を意味します。そのせいでしょうか、当館の周りにはカラスが沢山いるような気がします。

（副館長 福沢 景）